長崎大学教養部紀要（人文・自然科学篇合併号）第37巻　第1号　207－218（1996年7月）

G. W. Cable の "Jean-ah Poquelin" と南部的問題

井　上　一　郎

G. W. Cable's "Jean-ah Poquelin" and the Southern Problem

Ichiro INOUE

(1)

誇り高いプランター貴族の最後の末裔であるクレオールの男が、押し寄せる時代の波に抵抗して兄弟愛を貫き、時代錯誤と恥辱と恐怖に包まれながら死に至るまでを描いた "Jean-ah Poquelin"（1875年）[1] は、George Washington Cable（1844-1925）の初期の傑作の一つである。南部の中でも特に異人種、異文化の香りのするルイジアナ州ニューオーリンズに生まれ、南北戦争を経験し、再建期をくぐりぬけ、第一次大戦後まで生きたケーブルは、一般には19世紀末のローカル・カラーの作家と言われながらも、S. A. Graw が言うように「最初の現代南部作家であり、南部文芸復興に先鞭を付けた」[2] 非常に重要な作家である。あたかもフォークナーの「エミリーの薔薇」を思わせるような人物描写、時と場所の設定、ストーリーの展開のあらましは次の通りである。

藍（インジゴ）栽培のプランターであり、後に奴隷売買と密輸にまで手を染めたジャン・ポクランはある日、突然町の人々との交流を避け始めるまでは、昔のクレオール社会では名が知られ尊敬された人物だった。しかし、七年前、弟のジャックを伴ってアフリカのギニアまで奴隷を買いにでかけて、ニューオーリンズに戻って来ると、それ以後、弟は町の人々の目から完全に姿を消してしまい、ジャン本人も人目を避け町の人々との交わりを一切絶ってしまった。カインとアベルの間の兄弟殺しの噂まで囁かれ、屋敷には幽霊が出るという噂まで流れる。一方、ルイジアナがアメリカの一部になると、北部からはアメリカ人たちが大挙してこの町に流れ込み、町は拡大し郊外へと膨張していった。そこで、新しい道路がジャンの屋敷をかすめて作られることになった。アメリカ人の政府の形態を知らないジャンは、その計画の中止を求めてアメリカ人の当局者に陳情し冷淡にあしらわれる。ある開発会

社がジャンの土地を買収し市場を建設しようとするが、ジャンの頑な態度は変わらない。そこで会社では秘書を使って屋敷の中を探らせることにする。屋敷で秘書が見たものは、彼をして一挙にジャンを町の冷酷な態度から守る側へと変えてしまう。業を煮やした町のクレオールたちは、ある晩、ジャンをリンチにかけるために集まる。秘書は必死になって彼らの行為を阻止しようとするが、とうとうみんなは屋敷へと押し寄せる。しかし、彼らがそこで目撃したものはなんと唖の黒人の召使と癩病にかかって、今や自分を守ってくれる者を失った弟が、兄ジャンの亡骸を屋敷から運び出す葬式の列だったのだ。

Cleanth Brooks と Robert Penn Warren が『小説の理解』(*Understanding Fiction*) の中で示唆したフォークナーの「エミリーの薔薇」とポーの「アッシャー家の崩壊」との類似性にヒントを得て、ゴシック的な面においてばかりでなく、それよりももっと重要な人間についての根本的な理解において、「エミリーの薔薇」はむしろケーブルの「ジャンナ・ポクラン」に似ていると指摘したのは Edward Stone[3] である。主人公と彼の住む町（の人々）との関係、屋敷の内部を町の人間からも読者の目からも遮断してしまうことによって生じるサスペンスなど、小説の構造を考えても、たしかに「エミリーの薔薇」は「アッシャー家の崩壊」との類似を離れて、ケーブルの「ジャンナ・ポクラン」に非常に近づく。

しかし、問題は「ジャンナ・ポクラン」が「エミリーの薔薇」に似ているというのではなく、「エミリーの薔薇」が「ジャンナ・ポクラン」に似ているのである。ケーブルの作品には、南部文芸復興のチャンピオンのフォークナーが扱ういかなる南部的問題がすでに用意されていたかという点をここでは考察する。

(2)

小説の時間と場所を設定した冒頭の一節は、その無駄のない文章で小説の書き出しとしてはほぼ完璧に近い。

In the first decade of the present century, when the newly established American government was the most hateful thing in Louisiana－when the Creoles were still kicking at such vile innovations as trial by jury, American dances, laws, and the printing of the governor's proclamation in English－when the Anglo-American flood that was presently to burst in a crevasse of immigration upon the delta had thus far been felt only as slippery seepage

which made the Creole tremble for his footing—there stood, a short distance above what is now Canal Street, and considerably back from the line of villas which fringed the riverbank on Tchoupitou-las Road, an old colonial plantation house half in ruin. (179)

最初に読者に紹介されるのが主人公になる人物ではなく、屋敷であることに注目したい。この小説は恐怖とサスペンスを主旋律にしたゴシック小説であり、ゴシック小説においては、ある意味で屋敷が主人公とも言えるのであるから、読者の視線はまずその孤立し荒廃した屋敷の姿へと向けられて当然なわけである。同時に、作者は洪水のように南部に押し寄せて来る時代の変化と、すでに敗北の兆しを見せている「植民地時代からの古い農園屋敷」の間の最後の戦いがこれから行われるかのような構図、つまり時間のリアリズムでゴシックロマンスを補強することを忘れない。

主人公が紹介されるとすればそれは、あくまでも主人公があたかも屋敷と一体、屋敷そのものであるかのようにしてなされるはずである。Irving Stone の指摘をまつまでもなく、それはポーの「アッシャー家の崩壊」、フォークナーの「エミリーの薔薇」の冒頭を読めば明らかである。病的なほど鋭敏な神経の持ち主のアッシャーと、「憂愁」と「陰鬱」の雰囲気を漂わせながら崩壊の危険を孕んだ建物との描写で始まるポーの小説では「館の性格と世間に認められたこの館の主の性格とが完全に一致していた」とある。また、若いころ、北部人のホーマー・バロンとの恋愛を取り沙太されながら、頑なにグリアソンの威厳にしがみついてその生涯を閉じたのがエミリーであるが、彼女の円屋根や尖塔のついた前世紀70年代のエミリーの古い屋敷はただ一軒だけ取り残されて、新しい南部を見下ろすかのように、「頑なで、コケティッシュな姿」をして人々からは「目障り以外の何ものでもない」と思われていた。つまり、屋敷の姿は主人公の精神のあり方、病いそのものであると言っても過言ではない。我がポクランの屋敷については、"of heavy cypress, lifted up on pillars, grim, solid, and spiritless, its massive build a strong reminder of days still earlier" (179)、"short, broad frame" (185)、さらには "dark, weather-beaten roof and sides" (181) で "like a gigantic ammunition-wagon stuck in the mud and abandoned by some retreating army" (180) と表現されている。つまり屋敷の有り様は、ジャンの身体の特徴を、さらには精神的な状況をも連想させるように周到に計算されている。

ところで、ジャンにとって最大の転機は、当時、藍（インジゴ）栽培が利益の挙がらなくなったことを知って、他のプランターたちが砂糖栽培に切り替えたのに対して、彼は一挙に富を得ようとして非人道的な奴隷の売買、あるいは密輸に手を染めたので

ある。新しい生き方を始めるに当たって彼が倫理、道義的な問題をどのように正当化したかを見てみよう。

彼にはそれが害悪になるとは思えなかった。みんながそれは絶対必要だと言っているではないか、それはみんなの要求に仕える仕事ではないか、確かに良いことなんだ。そこで彼はたくさんのお金を儲け、みんなの尊敬を得たのだ。(182)

奴隷制度はアメリカ南部にとっていわば呪いであり、そのために南部文明は崩壊を運命づけられていた。それと同じように、フランス人が黒人奴隷制をもとにルイジアナに建設したクレオールの社会、文化も南北戦争を待たずに、すでに北部のアングロサクソン的な文明の前に衰退を余儀なくされつつあった。それゆえに、ジャンがそれまで主に北部人が支配していた奴隷売買に自分も乗り出し、かつてニューオーリンズのクレオール社会をリードしていたポクラン一族の立て直しを企てた時、彼は彼が属する社会制度の呪いをまさに体現することになったのだ。[4)]

ジャンによって正当化され、社会的にも認知されて無化されたはずの悪だが、必ずそれは存在を主張し、ジャンの人生そのものの破滅につながるだろう。それは一旦、周囲から隠され、また隠されることによってより一層、その所在と重要性を宣伝する。隠された悪、罪と言ってもよいが、それが弟の病（癩）であることは言うまでもない。[5)] 弟の体を蝕む病は、兄ジャンの社会との交流を奪い、彼を孤立させる。つまり、屋敷は町との交流を失い、時代の流れからも取り残されて、荒廃、腐朽するにまかされたのだ。町のみんなは弟の病気も、従って兄の孤独の理由も知らない。それでも、悪の目論見は完全に達成されたのだ。悪はそれが内抱されている世界の存在を周囲に向かって主張したからだ。グリアソン家の威厳はエミリーの屋敷から発生する悪臭を無いものにすることができたが、ジャンを疑惑から守ってくれるようなポクランの威厳はもはやなかった。ジャックの失踪に気づいた町の人々はジャンにむかって「おまえは弟のアベル（ジャック）をどうした？」(183) と疑惑の目で見続けた。

Petry が Egan[6)] の意見と違って、屋敷はポクランの個人的な象徴であると述べているが[7)]、たしかにそうでなければならない。屋敷は過去のポクラン家の栄光と威厳を示すものであった。しかし、今の屋敷は町の人々にその理由を知らせないまま主人の身を隠すものであると同時に、ジャンという一人の男の存在の内実、秘密を示すものでもある。そこに住む人間が精神の奥底に隠し持つ病をも写し出すものである。

たしかに疎外と退廃を表わす彼の屋敷はストレートにジャンの生と対応している。しかし、彼自身の風貌と性格、つまり屋敷の表情には時代の攻勢に抵抗して人間の不滅性を暗示するような何かが見え隠れしてはいないか。彼の顔は “bronzed leonine

face”(185) で、彼の目が “large and black” で “bold and open like that of a war-horse, and his jaws shut together with the firmness of iron”(185) である。また屋敷は、不本意ながら退却の途にある部隊によってぶざまに沼地に放置された弾薬を運ぶ馬車のように見えたとある。屋敷の様子を通してジャンが今なおその不屈な人格を保持していることを如実に物語っている。それはジャンが運命を雄々しく耐えて兄弟愛を貫き、不滅の精神を証明してみせる可能性さえ予感させるのだ。

(3)

「ジャンナ・ポクラン」に存在して「エミリーの薔薇」に存在しない人物、というよりも、技巧家フォークナーが細心の注意を払ってその存在を許さなかったと言ったほうが正しいかも知れないが、それは土地開発会社の秘書ホワイトである。フォークナーは徹底して主人公と町の緊張関係を維持することによって、ゴシック的なサスペンスを高め、最後に恐怖の裏側に隠されたエミリーの悲劇の意味を示そうとした。本作品ではその意味ではこの関係は壊れていると言えよう。ジャンは町を避け、町は彼を避けるというジャンと町の関係の仲介の役目をホワイトが担ってしまっているからだ。

ホワイトは「エミリーの薔薇」では、彼女の屋敷から漂ってくる悪臭を消すために石灰を撒きに派遣された町の人々に相当しよう。だが彼らが目撃することが可能だったものはといえば、明りの点った窓辺に佇むエミリーのシルエットだけで、臭いの謎については一切知らないまま退散したのであった。エミリーの屋敷に忍び込んだのはただ単に「四人の男たち」で、彼らはこそこそとまるで「盗人のように」彼女の敷地の芝生を横切り、建物の土台まわり、地下室の入口に石灰を撒いただけで任務を終えた。「盗人」のようにとあるのはある意味で当然として、彼らに名前がないのという事実は注目に値する。フォークナーの短編では固有の名前を与えられた人間というのは存在しない。彼らは、ジェファソンの町の歴史に大きく関わったサートリス大佐、スティーブンス判事を除けば、すべて無名の大衆的な存在でしかない。感傷性に支配され、少しばかりの大衆的な判断力を備えた彼らは、「われわれ」という名前の集合的な存在で、貴族の末裔、エミリーの運命について周辺にあって、彼女に対する意見を刻々変化させてはばからない存在にすぎない。

秘書のホワイトはこの点、匿名性からからは救いだされている。William W. Evans[8] によればホワイトなる名前は当時のニューオーリンズでは極めてありふれたどこにでもある平凡な名前であったという。その彼を無名性から引き上げているものはといえば、彼がこの小説で果たす役割、それと彼が示す人格の重要な変化にちが

いない。彼は一種物見高い、お節介な仲介者ではない。むしろ、町の人々、読者のジャンに対する見方をリードしている。その意味では作者ケーブルの分身とも言っても過言ではない。

「穏やかな性格で優しい心の持ち主で背が低い」(195) 彼はみんなから「チビのホワイト」(195)[9] と呼ばれている。みんなが屋敷の中に足を踏み入れることを恐がる中で、「何も恐がらなかった」(195) この勇敢な秘書のおかげで我々は、疑惑を向け続ける町の人々より先に、ジャックの生存を知ることができた。触覚(「今、飛び出してあいつに触れば謎が解けるんだが。」)(197) を除けば、視覚、聴覚、臭覚をすべて使って彼はジャンの他に屋敷に住む生きた人間が存在することを確かめる。

彼が最初にその人物の存在に気づいたのは、その「異様な、気分の悪くなるような、どこか遠くから臭ってくるように微かなではあるが、吐き気がするような、そして恐ろしい」(196) 臭いによってである。病気の弟が屋敷の母屋を出て、黒人の小屋を覗きににやって来て、また戻るまでに、彼が体を動かすたびにその臭いは秘書に強烈に伝わってきたのである。

その実体を証明するものとしては、それが発する音も有効である。秘書は「彼(弟)の足音を聞いたし、それとは別にベランダの上でポクラン老人の足音も聞いた」(198) から、その得体の知れない存在は「幽霊ではなく生きた人間だ」(197) と結論する。臭いと同様にこの上なく不快な印象を与えたのが、その「人間」が出す声であった。窓の隙間ごしにポクランと交わす会話は人間のものとは思えないほど「不自然で、虚ろに響き、不協和で、この世のものとは思えなかったので、それを聞いていた秘書は頭の先から爪先まで震えた。」(198)

秘書にとって視覚ほど頼りにならないものはなかった。場面は夜だから当然かもしれない。彼にはその「人物」は「幽霊のように白い」(196) 姿に映る。また「闇のために何か白い服を着ているのか裸なのか判然としなかった」(197)

しかし、彼は最後には「あー分かった。これで合点がいった。」(197) と叫ぶ。彼の勇気が彼を屋敷へと導き、彼の五感は彼がジャンの屋敷の謎の核心に近づくことを可能にしたのだ。我々も彼と一緒になってこの時、ジャックの生存と大まかな状態を知ることができた。しかし、屋敷にまつわる謎は依然としてサスペンスの状態に置かれたままにされたと言ったほうが正確である。弟のジャックが正確に癩病にかかっていることが明らかになるのは小説のまさに最後だから。フォークナーが律儀に視点の一貫性を貫いたのに対して、ケーブルは安易に屋敷への闖入者を作り上げたというのではない。秘書の頭に閃いた真実は、彼の胸の中でジャンに対する同情と憐憫の念を育て、ジャンに対する敵意に一人で立ち向かう英雄的な人物へと彼を変えたのである。ホワイトは作者ケーブルの分身ではないか、と言う事実はすでに述べた。Louis D.

Rubin, Jr. にならって、Thomas J. Richardson[10] も、当時のクレオールたちの文化に対して魅力を感じながら、同時にその腐敗に反感を感じとるというケーブルのジレンマが、そのままホワイトに投影されていると指摘している。

(4)

ポクランが世間を捨てて屋敷の中で逼塞して暮らすことになった理由は、弟の病気にあると推測できる。それでは弟のジャックが病気にかかった原因はというと、bookish な彼が何を思ったのか兄の旅行、奴隷をアフリカのギニアに行って捕らえてくる目的の旅行に同行したことにあるらしい。二人が出発したのが今から九年前のことであり、それから二年後に兄一人が帰国を目撃され、彼はそれ以後人目を避けた生活を始めたのだ。奴隷の売買に旧家の復興をかけたはずの兄ジャンは、今回は「空の船荷を持って帰った」(182) とある。つまり、彼は今回の旅行をきっかけに家運のこと、社会的な地位のこといっさいを放棄した人生を選んだのだ。

弟のジャックは現地ギニアで癩病を発症し、弟の病気の種類を知った兄は弟の帰国を秘密にして屋敷で二人だけの生活を始めたのだ。それは兄が弟の病気の種類を知って奴隷の売買の仕事が今まで通り続けられなくなったと判断したのか、あるいは、Petry の言うように「癩病の多いギニア海岸へ弟を同行した罪の意識」[11] のためか、あるいは奴隷売買の悪を彼自身が悟ったためか、そのうちのいずれかである。

病に対して、あるいはその病気にかかった者に対して伝統的に与えられたイメージを文学の中で跡づけたのがS·ソンタグの『隠喩としての病い』であるが、彼女はその中で「古代世界の人々は、病気とは神の怒りを表わす手段であると考えることが多かった。審判は社会に対して下されることもあれば…個人に対してのこともある。」[12] と述べた後、「病気懲罰説」の一つの例として「中世においては、癩患者とは堕落を眼に見えるものとする社会的テキストであり、退廃の見本、象徴であった。」[13] とも述べている。彼女の考察の中心は結核と癌だが、この癩も含めてこれらの病の治療の困難性がこのような前近代的な観念を導いたにしても不思議ではない。

癩病についての当時のニューオーリンズの市民の受け取り方を正確に知ることは困難ではあるが、この病気に対する社会全体の考えは、小説の最後で庇護者を失った弟のジャックが「癩病患者の国」として知られている沼地の奥にある山へと向い、隔離されなければならない者としての運命を全うしたという事実にわずかに窺い知れるだけである。カトリックの美質を失わないクレオールの一人ジャンが、最愛の弟の運命を見て自分の罪のことを思わなかったとするほうが不自然である。

癩病 (leprosy)、癩者 (leper) についての言及は聖書に多いが、新約、旧約を比

べると圧倒的に旧約に多い。旧約では、「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」「サムエル記」「列王記」「歴代誌」において、新約では「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」に言及がある。特にモーセ五書の一つで祭司の書という別名のある「レビ記」には、祭司がこの病について判別する仕方、したがってその人間が本当にその病にかかっていて「汚れて」(unclean) いるかどうかについて事細かに記述 (13-14章) がある。癩病は少なくとも旧約では汚れたもの、聖なるものの反対、罪に等しいものとして一貫して、人間社会から遠ざけられている。しかし、新約になるとそこにイエスが登場して彼らは癒しの対象として描かれている。彼らは他の難病を患う者たち、あるいは罪人たちと同じく一番救いが必要とされていて、秘匿され疎外された場所から進み出てイエスによってたちどころにその病から解放されている。

ここで我々は同じ熱帯性の病である黄熱病を扱った John Edgar Wideman の「熱病」を見てみよう。1793年にフィラデルフィアを襲った黄熱病の蔓延を素材にしたこの小説の主人公は黒人で、彼は自分たちを虐げ差別する白人の病人、死体の処理に献身的に奉仕している。この知的で内省力に優れた黒人は「サント・ドミンゴから来た、鼠の巣食った船が熱病をもってきたそうだ。その船には、黒人の暴動から逃れてきたフランス人と黒人奴隷とが乗っていた。焼けつくような熱帯気候の東インド諸島で流行る、バルバドス・ジステンバーという病気がある。その患者を見たことのある者は、フィアラデルフィアのこの熱病はあれと同じものだという。」[14] という人々の意見に対して、「私はそうは思わない」と言う。「内側から人を蝕む干ばつが熱病なのだ…人が人を売り買いするとき、心の中の秘められた場所に熱病が巣食い、肥え太ってゆく。」[15] とほとんどソンタグのような口調で昔奴隷だった彼が白人の奴隷制度の罪と熱病の関係を言うのだ。

この Wideman の小説は奴隷制度という社会の病弊に肉体と精神を現実に蝕まれてきた黒人の側からの省察であることが特異な点である。彼の小説はフィラデルフィアに取材されているが、むしろ黄熱病が幾度となく猛威を振るい、奴隷制度とさまざまな悪徳の渦巻いていたケーブルの描く深南部のニューオーリンズこそ「隠喩としての病」についてのテーマがふさわしい場所であるかもしれない。

病が醸し出す個人的、社会的なイメージを複雑、濃密なものにし、さらに進んで病と罪の観念とを分け難くするのは19世紀的な精神風土であるが、その中にあっても、その関係を知ることは旧約に出て来るヨブのような義人にとってさえも本当は困難であったことだ。先に述べた社会的な場において容易に自分の商売を一旦は正当化していたからだ。それを可能にしたのは、彼らがポクラン家の「最後の末えい」(180) として血の消滅を前にした時、逆にその血と、実存の重大性を無意識にではあれ認識していたからだ。

「彼らはお互い愛しあって幸福に暮らしていたようだ。父も母も妻もなく、この地上には縁者は一人もいなかった。」(181) しかし、彼らの性格はこれほど対照的な組合せはないほどだった。「兄は大胆、正直、直情的、騎士道的な冒険家で、弟は優しく、勉強好きで、本好きの世捨てびとだった」(181) からだ。それにも関わらず、彼らはまるで「ひとつがいの鳥のよう」(181) だったとされている。お互い伴侶のいない兄弟は、もはやポクラン家の個としての存在感を失い、不毛な一体感を確かめながら生きることを余儀なくされていた。ジャンをして上にみたような生き方を選ばせたのは、まさにこのためである。本来、弟ジャックの不治の病いはジャン本人のものではないのだ。しかし、彼にそのような思考の回路は許さなかったのは、いうまでもなくポーのアッシャー兄妹に見られるのと全く同一の、一族の末えいとしての一体性にほかならない。

(5)

社会との交流の記録のない「アッシャー家の崩壊」のアッシャー兄妹は除くとして、「ジャンナ・ポクラン」のジャン、「エミリーの薔薇」のエミリー、彼らは一様に時代と戦った後、敗北を認めるかのように自分たちの世界に閉じ込もり、社会に対してはその古びた、崩壊寸前の、それでいて貴族としてのプライドと矜持を示す屋敷の外部だけをさらし、内部に住む者についてのさまざまな憶測を許すことになる。彼らの本当の戦いの記録というのは、最後まで町の人々にも読者にも知らされない。

しかし、エミリーもポクランも没落貴族の醜悪さのみを周囲の人々に目撃され、嘲笑と哀れみの対象とされただけだろうか。否。エミリーには「彼女は頭をつんと高くあげていた —— われわれが彼女は没落したと信じるようになったときでも、彼女は頭を下げはしなかった。それはちょうど、グリアソン家の最後の人間としての自分の尊厳を認めろと、いよいよきびしく要求しているような」ところがあったし、道路建設の件でアメリカ州知事、市の役人に陳情にでかけた時のポクランの姿の描写は、彼が獅子のような顔で軍馬のような目をし、口元は鉄のように堅く閉じていた一方、彼の顔の表情には弟の運命を憂える悲しい表情さえ浮かんでいたと英雄主義的なタッチが特徴的だ。案の定、要求が受け入れられなかったが、彼は昔のフランス国王の臣民としてのプライドを守り、屋敷についての噂に対する彼らの好奇心を一蹴することには成功したのだ。

アッシャーにしろエミリーにしろ最後に彼らは戦いの不毛さ、勝利というものがあるとすれば、そのグロテスクな勝利の姿をみんなの前に示す時が来た。ミイラ化したホーマー・バロンの死体、生きながら埋葬され断末魔の苦しみを表すかのように血塗

れの妹の死体がそれである。一方、我がポクランが示したものは兄カインの手にかかって殺されたはずの弟の生きた姿だった。しかも彼は「雪のように白い」皮膚をしていたのだ。「雪のように白い」弟が今までの町の噂、屋敷の中の幽霊の存在の謎を解き、また弟を守るという兄のそれまでの不屈の意志、人間性へと読者の思いを至らせるが、ここではその雪のような「白さ」にケーブルが込めた意味を探ってみよう。

ニューオーリンズのクレオールを題材にしている初期のケーブルの小説にはプランテーション文明の副産物である混血のテーマが多く付きまとうのは当然で、*Old Creole Days* において言及される「白い」イメージというのはほとんど例外なく皮膚の色に使われている。"Madame Delphine" (1881年) ではいわゆる「混血」(46) の夫人が白人との間にもうけた娘は「色が白く、美人」(27) で、折りにふれて彼女の肌、着物の「白さ」が強調される。この "Madame Delphine" に非常によく似た小説の "'Tite Poulette" (1874年) も同様で、主人公の混血の夫人の娘は「百合のように」とも「マグノリアのように」(214) ともその肌の白さが伝えられ、これまた同じく最後に夫人が娘の本当の親についての秘密を明かす場面でも、娘には黒人の血は一滴も混じっていないで「雪のように白い」と断言する。そして、この「雪のように」という強調された表現の裏には、そうでない場合、つまり、その「白さ」が汚される恐れと不安の深淵が横たわっているのである。黒人奴隷制の上にフランス人プランター、その子孫のクレオールたちが築いた文明が内に抱えた呪い、血の問題が深く、深く人々の意識を支配していたことを物語っている。

さて、混血のテーマが一見したところでは存在しないように見える "Jean-ah Poquelin" ではどうかと言うと、ただ一つ月についての言及 (201) を除けば、「白さ」はすべて弟のジャックについて用いられている。いまだ彼の生存が確かめられず幽霊と思われていた当時は「幽霊のように白い」(196) 姿が秘書によって目撃されたし、彼自身がみんなの前に姿を現すと今度は「雪のように白い」(209) と表現される。

しかし、はたして混血のテーマは存在しないだろうか。表面上はないように見えるこの作品にもそれを推測することは可能である。つまり、兄ジャンと弟のジャックは30才も年が離れているということは、今は亡き父が混血の女に生ませた子がこのジャックで、彼はいわゆる非嫡子であるということも考えられるのだ。違った血の混じった彼ら二人が一族の最後として仲良く暮らしている姿は、すでに "Belles Demoiselles Plantation" (1874年) にも描かれているからだ。さらに、長編 *The Grandissimes* (1880年) では、同じ名前 Honore をもった嫡子、非嫡子の兄弟の存在が思い出される。[16)]

この推測の域を出ない血の問題が実は、この作品における「白さ」の意味を解明する上で重要である。まず兄のジャンはプランテーション経営に行き詰まって奴隷の売

買に手を出したわけで、彼はそれ自体の背徳性と同時に、上記の二人の夫人の苦悩の根元をニューオーリンズ社会に用意した二重の罪が今問われているのだ。それが弟の不治の病として顕現したことはすでに述べたが、兄のジャンはその弟を守り、隠し通したのだ。旧約においても人間の罪、汚れを表す者としての癩病患者の体は「雪のように白い」(「出エジプト記」4：6、「民数記」12：10、「列王記下」5：27) と同じ言い回しでその白さが強調されている。だから、上記の二つの短編の主人公の夫人たちの強弁、「雪のように白い」という言葉と同様、弟の「雪のように白い」体も、その表現とは逆にすでに犯された罪を暗示していると言えないだろうか。

しかし、この小説に書かれている兄のジャンの行為のほとんどすべてが、まさに遠藤周作が「雑木林の病棟」の中で描いている昔の聖人のように、病の弟を深く胸の内に抱き、守り通すことに費やされたことは見た通りである。自分の生命を、あるいは自分の人生を弟のジャックのために捨てたこと、このことを最後に証明する手段、それが自分の葬儀の時にみんなの前に明らかにした弟の姿であったに違いない。旧約聖書の「レビ記」には「癩病がその患者の皮から頭から足まで…ことごとく被っておれば、その患者を清い者としなければならない。」とある。今や兄のジャンも「清い」のかも知れない。

(注)

1) 1879年に他の七篇の短編と一緒に *Old Creole Days* の中に収録された．本論で使用した版は Charles Scribner's Sons, 1927年版．以下，引用はすべて本版からで，頁数のみを記す．
2) George Washington Cable, *Old Creole Days* (Signet Classic, 1989), Introduction.
3) Edward Stone, "Usher, Poquelin, and Miss Emily," *Georgia Review*, 14 (1960), p. 433.
4) シンシナティで記者生活をしていたL. Hearnは，ケーブルの「ジャンナ・ポクラン」を読んで，ニューオーリンズに来る決心をしたと言われているが，奴隷制の呪いの激しさは，ハーンが記録したマルチニク島に伝わる伝説の主人公ラバ神父，島に最初に奴隷制を確立したと言われるその神父の亡霊の話（「クレオール物語」）にも我々は窺い知ることができる．
5) Thomas J. Richardson, "George W. Cable 'Jean-ah Poquelin'," *Mississippi Folklore Register*, 21 (Spring/Fall, 1987), p. 85は，その悪の外在化がポクランの死によって成就される，としていて，弟の不治の病と宿命の関係を見落としているとしか思えない．
6) Joseph J. Egan, "'Jean-ah Poquelin' : George Washington Cable as Social Critic and Mythic Artist," *Markham Review* 2, no. 3 (1970), p. 6.
7) Alice Hall Petry, *A Genius in His Way* (Associated University Press, 1988), p. 93.
8) William W. Evans, "Naming Day in Old New Orleans," *Names*, 30 (1982), p. 184.
9) Louis D. Rubin, Jr., *George W. Cable* (Pegasus, 1966), p. 28. ケーブルも体格には恵まれなかった．
10) Thomas J. Richardson, *op. cit.*, p. 87
11) Alice Hall Petry, *op. cit.*, p. 93.
12) スーザン・ソンタク「隠喩としての病い」(みすず書房), p. 60.
13) 同上, p. 87.

14) ジョン・エドガー・ワイドマン「熱病」(「ニューゴシック」新潮社), p. 152.
15) 同上, p. 153.
16) Williams W. Evans, *op. cit.*, p. 190.

(1996年4月30日受理)